
攻撃魔法が使えない魔導士

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

攻撃魔法が使えない魔導士

【Nコード】

N2648Y

【作者名】

こーこうせい

【あらすじ】

いつもどおりの毎日を望む一人の魔導士、アキナ。ナカジマに訪れた非日常。

魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次創作。オリ主の二次小説ですよー！！

目指せ！週一更新！！

第1話 急な異動。出向、機動六課（前書き）

どもも！こーこうせいです！

2つもやってるのに調子乗りました。はい。

つてか前々からやりたかったStrikerSです。実は原作コレが一番好きですよ〃ww

オリ主、オリジナルストーリーありな気がしますよ！

そーいうの無理って人はバック転しながら退却しましょう！

第1話 急な異動。出向、機動六課

新暦75年 春

そろそろ桜も満開になろうという時期。ある人は出会いに喜び、ある人は別れに涙するこの頃。
とある場所に二人の男がいた。一人はすこし年のいった男。一人は長身の男。黒い髪にキツイのが目に付く。

「ゲンヤさん。話ってなんすか？」

「ああ？お前俺のことは親父って呼べっていつてるだろ？アキナ」

そこにいたのは

時空管理局 三等陸佐 ゲンヤ・ナカジマと
時空管理局 一等陸士 アキナ・ナカジマ

アキナはゲンヤが座っている場所の正面に座った。
ソレを見てゲンヤは話し出した。

「お前が俺の部隊に入って、もう半年。お前の成長ぶりは凄いからな。俺はお前にいるんな経験をさせてやりたいと思ってるんだ」

アキナは現在ゲンヤが持つ部隊、陸上警備隊108部隊に配属されている。配属で半年だが既に数々の任務を難なくこなせている。実は魔法を使うようになったのは数年前なので、その成長振りはすさまじかった。

「はぁ……」

「お前も今年で17。うちに来たときはまだちっせえガキだったが今じゃ俺よりでけえ」

「あの、話が見えねえんですけど？」

アキナは如何にも分かりません。といった顔でゲンヤを見る。

「そうだな……。単刀直入に言おう……」

お前異動な」

訪れる沈黙。この間三秒
その後現れたのはアキナから発される叫び声

「はあああああああああああああ！！？」

悪巧みをしたような顔のゲンヤと意味分らないくみたいな顔のアキナ。

「あ、ちなみに明日からな」

「はあああああああああああ！！？ってめ！そういつのは早く言えよ！！準備とかあるんだぞ！！？」

爆弾発言が投下され、見事な叫び声。
その後すぐにゲンヤの娘、ギンガに「うっさい！！」と殴られたのは秘密だ。

攻撃魔法が使えない魔導士

第1話 急な異動。 出向、機動六課

現在、アキナは自分の荷物を整理していた。正直急な異動なので何を持っていけばいいか分からない。なのでとりあえず数日分の着替えと、少し大目の金、愛用している音楽プレイヤーのみを入れて準備を完了としておいた。

明日から行くのは……機動六課、か。

一人思うアキナ

時間は少しさかのぼり、ギンガに頭をグーパーンされた後のこと

「……で？俺はどこ行けばいいんすか？ゲンヤさん？」

「おお、受けてくれるのか。ありがてえ」

いや、受けてくれるって。上司の命令は絶対でしょうが

「でな、お前が行くのは時空管理局本部古代遺物管理部『機動六課だ』だ」

「機動六課？」

聞いたことのない言葉にアキナは聞き返した。

「ああ。今回俺の下にいい狸……もとい八神が部隊を立ち上げるんだわ」

そういつつ、ゲンヤは俺に資料を渡してきた。そこに乗っているのは機動六課の名簿表。アキナはソレに目を通すなり

「ブフツ!!?」

飲んでいたお茶を吹き出した。

おいおい、何だこの面子は。

管理局のエース 高町なのは一等空佐

金の閃光 フェイト・T・ハラオウン執務官

部隊長である夜天の主 八神はやて

それに八神はやての固有財産であるヴォルケンリッターの面々

どれも管理局内の有名人物じゃないか！！

「……で？この面子の中に入って俺が何をしろと？戦力的には十分すぎますよね」

こんな面子に入ったところで俺だけ浮くじゃねか。

「もつとちゃんと見る。下のほうだ」

ゲンヤに言われ、アキナはリストの下のほうを見る。
そこにいたのは

「スバル？」

「ああ。もつと下を見てみな」

スバルというのはゲンヤの娘。

ナカジマ家は大黒柱、ゲンヤをトップにして、年齢順にギンガとアキナ、スバルといる。ギンガとアキナは同じ17歳だ。ギンガとアキナはゲンヤ率いる陸上警備隊108部隊に所属していて、スバルは訓練校を卒業後、災害救助の方の部隊に入った。

名簿をさらに下に見ていくと。そこにいたのはティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエとある。

スバルを含めるすべてのメンバーがほとんど実戦経験もないような新人。エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエなんてまだ10歳だ。

「……………どういつもこいつも新人ばかり……………」

「ああ、そうだ。隊長陣は有名でもその下がな。だから俺はお前に頼んだんだよ。お前は新人ではあるが既に任務をこなしてるし、実力もある。それにこれから先のためにもなると思う。どうだ？そこまで悪い話じゃないだろ？」

うーん、とアキナは呻く。

「いやね？正直面倒くさ……………俺より実力ある奴の方が……………ほら、ギンガとか」

「お前今めんどくせえつつたろ？ってか話し聞いてたか、おまえ。それにギンガはダメだ。」

「なんで」

「娘に怪我をさせると」

「俺ならいってか！！？」

くそぞう。俺の扱いひでえな

「ま、俺はお前を信じてるんだよ。じゃ、明日から頼むわ」

それだけ言っただけでゲンヤは部屋を出て行った。一人部屋に残されたアキナは

「仕方ねえ！いっちょやってやりますか！..」

と決意を決めた。

辞令伝達

アキナ⇨ナカジマ（17）

明日より時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課へ出向を命ずる。

第1話 急な異動。出向、機動六課（後書き）

感想待ってます…ってか1話じゃ無理だよなw

第2話 始動(前書き)

結局二日連続更新です(笑)

まあ、たいした事やってませんけどね。

ティアナとは、なんとなくくっつけたい今日この頃。

第2話 始動

8 : 1 2

「はやてちゃん。今日から始動、だね」

「そやね……これは私の夢でもあるんや。 氣い引き締めな」

今私、高町なのははこれからお世話になる機動六課の隊舎の部屋を
一つ一つ回っている。

機動六課は私たち3人の夢でもある。いろいろな人に協力してもら
ってやっとできた部隊。大事にしなくちゃいけない。

「それにしてもよかったね、なんとか隊員集まって」

「ほんとや……なのはちゃんとフェイトちゃんの紹介がなかった
ら今日はじめられなかったわ」

はやてちゃんは思いつきり息を吐きながら言った。

実はメンバーを集め終わったのはこの間だったりする。原因は直前
まで相談しなかったはやてちゃんと、そのはやてちゃんに知り合い
がほとんどいないって言うこと。本局に顔が利く人がほとんどいな
いせいで後見人もみんな身内。部隊が発足できたのも後見人の功績
のおかげって言うのが大きい。だから今回の部隊のロングアーチは

誰も知っている人とか、過去にお世話になった人ばかり。知らないのは今回スカウトした新人達ぐらいかも。

「そういえば、はやてちゃんが言ってたもう一人の隊員ってどうなつたの？」

「ああ、ゲンヤさんが紹介してくれた人ね。私もよく知らないよ。ゲンヤさんの部隊にいる新人で優秀な成績を残してる人らしい。私らの隊員が新人ばかりなのが気になったんで、こいつ貸したるっ！
って」

「にははは……私がスカウトしたティアナとスバル、フェイトちゃんのところのエリオとキャロも新人だもんね」

「せや。と、そこで紹介してもらったんよ」

「へえ……どんな魔法を使う子なの？」

そういつて私ははやてちゃんから資料を受け取った。
そこに書いてあったのは

「アキナ^{II}ナカジマー一等陸士……あれ？スバルの家族の方なんだ。
保有魔力量B⁺、陸戦ランクB……使用魔法……プロテクション！
！？はやてちゃんどういうこと！？」

「そ。そこが謎なんよ。使用魔法のところにプロテクションで……よく分からん人なんよ。それでも陸戦ランクBって」

「どんな子なんだろうね……」

「あ、あとその子の推薦者はゲンヤさんだけやないで？なんとユーノ所長も推薦しとる」

「ユーノ君が!!?」

なんでユーノ君が……

「面白い舞台になりそうだね……」

「私も楽しみや」

私達は心躍らせながら引き続き部屋を回る。今日の9時に全員が集まる。私は既にそのことが待ち遠しくて仕方がなかった。

第2話
始動!

8:53

「うん……?」

くあ……!!よく寝たなあ……

アキナは自分のベッドから起き上がり大きく伸びをした。体の骨がポキポキと音を立てた。

「つてか今何時だよ……」

そういつて自分の頭の上にある時計を見ると

8:54という文字

ここから隊舎まで軽く20分はかかる

えーと、新人セレモニーが9時からだから……

「ド遅刻ド欠席!!!?」

アキナは光のごとくの速さで着替え、荷物を持ち、準備した。

てかなんで目覚ましならねえんだよ!!!昨日ちゃんとセットしたのによお!!!

自分の部屋から出て、階段を降り、玄関まで来るとそこにはなぜか

ゲンヤが

「おいおい！どいてくれよ！早速遅刻しそうなんだよ！！？」

「まあ落ち着けて。まず目覚まし止めたのは俺だしな」

……今すげえ発言したなオイ

アキナは自分の荷物を地面に置いて、ゲンヤと対峙するように立った。ゲンヤはソレを見た後に口を開く

「お前がこれから行く部隊の新人はまったくいいほど経験がない。その中でお前は唯一経験のある新人だ。お前がリーダー格じゃねえのは分かってる。だが、そいつらを引っ張って行ってやってほしい。コレは狸の夢でもある。ぶち壊したくねえんだ。だから頼む」

「ゲンヤさんが頼みを出すなんて珍しい。天変地異の前触れか？」

アキナは冗談交じりに笑う。しかしゲンヤの顔は真剣そのもの。アキナもソレを見てまじめな顔に戻す。

「でも、もちろん全力でやらせてもらうっすよ」

「ああ………なら、行って来い」

「っす」

アキナはゲンヤの隣を通り過ぎ家を出た。その顔は少し誇らしげな顔。威風堂々、道を歩く。
アキナはうれしかった。多分はじめて、ゲンヤに頼まれた、任されたからだ。

しかしそんな顔は長続きしなかった

俺、ゲンヤさんのせいで遅刻してんじゃん
どーしてくれる。初日から時刻だよクソ野郎

9 : 1 2

新人セレモニーを始めて、部隊へのあいさつを終えたんやけど……

「アキナ君、来てないね」

「どうゆうことやろなあ……すでに新人達は顔合わせてる言つのに」

なぜかアキナ君だけ来てへん！まったく！……と、怒っとなるところに
通信が。

ゲンヤさんから？

『おう、八神。部隊のほうはどうだ？』

『どうだもクソもまだ始まつとりませんがな。ソレよりゲンヤさん、アキナ君知りませんか？』

『ん？アキナの奴か？あいつはもうすぐ行くんじゃないか？俺が目覚まし止めといてやったから遅れてるぞ』

『……………』

何しとるんやこの人は……………！！

『ほら、来たみたいだぜ？じゃ、後は頼むわ』

そういつてゲンヤさんは通信を切った。

そして入り口のほうを見てみると長身黒髪の日つき悪い男が走ってきた。

「あ、アキナ、ナカジマ、一等陸士です…今日から、お世話に、な
りま、す……………」

「焦らんでええで。事情はゲンヤさんから聞いとる。詳しい話はもう聞いてると思うから、ほら、向こう行って新人と顔合わせしとき」

「りよ、了解です」

アキナを新人のほうに送り、一息。
一悶着あったにせよこれで全員そろった。本日を持って、機動六課は始動した。

はあ、なんでこんなに走んなきゃならねえんだろ。
っと、新人はこいつらか。まだ会ったばかりのはずだけど、まあ話せてはいるみたいだな。さて、ちよつと脅かしてみるかな。主にスバルとティアナを。

アキナはスバルはもちろん、ティアナとも顔見知りだ。スバルがまだ候補生のとき、休暇中に街中で会って、それからいろいろの話をしたら、まあ、少なくとも顔見知りにはなっている。話の内容は随分重かつただけど、ソレはまたいつか。それ以来ティアナとはいろいろメールとかもしてるから、拒絶はされないはず。

そうしてアキナはスバルとティアナの後ろからゆっくり近づいた。
新人4人は円を組むように立っているの、スバルとティアナの二人の前にいるちびっ子達……たしかエリオとキャロからは丸見えだ。
途中エリオとキャロがこっちに気づいたのだが

(シーー！)

口の前に人差し指を当てて、黙ってる、のポーズ。

さて、どんな会話をしてるのかな？

「そんな風に呼ばなくていいわよ。堅苦しいからティアナでいいわ」

「私も。そういう呼ばれ方苦手だからスバルでいいよ」

……ティアナも丸くなったなあ

前にあったときはもつと硬かったのに。スバルのあほ丸出しは変わらんが。

「じゃ、じゃあスバルさんとティアナさんで」

「私もソレでお願いします…」

あ、馬鹿。そんなにどもつたらばれちまうだろエリオ君。
まあ、バレルのは早いほうがいいか

「どづしたのよエリオ。そんなにどもつて」

「い、いえ。何でもありません!!」

ここはエリオに習って…

「じゃ、俺もお前らのことはティアナとスバルって呼ばせてもらうわ」

「「え?」「」

二人は同時につぶやき同時にこっち向いた。そのときの顔といったらもう…笑いが止まらないよ

第2話 始動（後書き）

使用魔法プロテクション（笑）

事実上無能ですねw w

まあ、うまく使っていきますけどね

次は新人演習という初戦闘のはず。うまくいけばデバイス出るかもですね。

っていうかこんな書き方でいいのだろうか？

ちよつと不安です（笑

ではまた次回に

感想待ってますね（わら

第3話 結成フワード陣！！ついでに初訓練！！（前書き）

っと、いうことで今回早速戦闘描写。

難しいよね。アキナさんの魔法については次回やるんで、そんなに
つっこまないでください。

でわでわ、どぞー

第3話 結成フワード陣!! ついでに初訓練!!

「「え？」」

このときのあたしの顔はどんなだったんだろう？
久しぶりに会うアイナさんの顔を見てぽっかり口が開いていた気がする。

「あ、アキナさん!!?」

「アキ兄!!」

「二人とも久しぶりだな! 元気だったか？」

「はい!」

「うん!」

実はアキナさんはあたしの兄、ティードと友人だった人で、部隊での兄の話をよく聞かせてもらった。10歳のころに兄に会って魔法のこととか教えてもらっていたらしい。同時に訓練とかも見ていたそうで、今ではあたしの知らない兄のことを知る少ない人の一人だ。初めて会ったときは目つきの悪い不良かと思っただけど、メールなど

をしていくうちに悪い人ではないと分かり、気づけば3年ぐらいメ
ールが続いていた。でも会うことはできなかったので、今回が久し
ぶりの会話だ。

「アキナさんもこの部隊に？」

「ああ。フワード陣の一人になるらしい」

「やった！！アキ兄とも一緒だ！！」

スバルはアキナさんの腕にしがみついた。

兄弟のじゃれあいもいいけどもう少し周りを気にしてほしいわ……。
エリオとキャラロがポカンとしちゃってるじゃない。

「紹介するわね。こちらはスバルの兄に当たる」

「アキナ⇨ナカジマー一等陸士だ。よろしくな」

「は、はい！エリオ⇨モンディアル二等陸士、10歳であります！」

「キャラロ⇨ルシルシエ三等陸士、私も10歳であります。それで、
こっちが白竜のフリード」

「きゅる〜っ！」

「俺もなんだかんだで新人だからな。これからよろしく頼むわ」

「「はい！」」

ちびっ子達のいい返事。

実はここで働くのは結構不安だったけど、この部隊ならなんとなくやっていけそうだ。

「んふふ〜〜」

「あなたはいい加減にきなさい！！」

「フゴッ！！？」

問題はスバル一人ね

第三話

フォワード陣結成！！ついでに初訓練！！

俺は今、エリオと一緒に更衣室にいる。

なんでも、早速オレ達の新人演習が始まるらしい。

今回の教官は高町隊長。エースオブエースに見てもらえるとは、なんと上がるね。

オレ達は着替えながら話をしていた。

「そういえば、エリオはどんな戦闘型なんだ？」

「は、はい！古代ベルカ式デバイスの近接型であります！」

「そんな堅くなくていいよ。せっかく仲間になったんだ。気楽に行こう。んで？古代ベルカか……扱いムズク無いか？」

「い、いえ、慣れればそんなでも………ところでアキナさんはどんな？」

「俺？俺はストレージ。一番扱いやすいからな」

そういつて俺はエリオに自分のデバイスを見せる。

つっても入隊のときに支給された奴をちょっと改造しただけの安物。それに型もかなり古かったりする。ちゃんと整備はしてるけどな。

「ストレージデバイスですか……使い込んでますね……」

「まあな……そろそろ行くこうか」

「ですね」

あんまり待たせちゃ悪いからな。オレ達は訓練場に向かった。

.....

と、訓練場に着いたわけだが

「「「「「広っ!!」「「「「「」

そこは見渡す限りの平面。ドンだけでかいとこ使ってますか。

「じゃあ準備はいいかな？」

高町隊長が俺らに呼びかける。

俺はうなずくこととしたんだが……

「本当にここで作るんですか？」

「何もありませんよ？」

あゝ

なるほど。空間プログラム使ったことねえのか。

高町隊長はちょっとにやけて

「シャーリー！」

と。するとどこからともなくシャーリーとフィニーノ陸士の声が。

『機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター……ステージ、セットアップ！』

すると出てきたのは

巨大な街一つ。

すげえな。ここまででかいのは初めてだ。写メ撮っとこ。

びりりん

うん。いい写真。

「今日から皆には、ここで訓練してもらおうから。頑張ろうね」

「「「「はい！」「」「」

ここ使えるってのはうれしいな。108部隊のときはボロ屋の前の広場だったからな。たまに本局の訓練場使わせてくれたけど。ゲンヤさんの力不足だなこりゃ。

ゲンヤさん、元気かなー……まあ、多分ギンガに怒られてるんだろ
うけどさ

- - - - -

さーて。今回の敵はどんなのだろうね？
とりあえず俺らは軽い運動をして、アップを済ます。あと一応コー
ルサインの確認とかも。

そんなことをしていると無線から高町隊長の声が

『準備はいいかな？なら早速いつてみようか。まずは軽く8体から
そんな声が聞こえたかと思うと俺らの前に歪な形の機械が。
あれ？これって

「ガジェットツスか」

『あれ？アキナ君は相手したことあるの？』

お？これは訓練回避フラグ……

「まあ、部隊で何度か」

『そっかそっか。なら、がんばってみんなを引っ張ってあげて』

じゃなかった。

ちよつとサボれるかも、って思ったんだけどな。

『私達の主な仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。その目的
の為に、これから戦うことになる相手が……これ。自立行動型魔導
兵器。これは近づいたら攻撃してくるタイプね』

俺が相手したことがあるのとは違うみたいだな。

俺が前に相手した奴はなんかへんな触手が出てた近接タイプだった。

『攻撃は鋭いからね。まだ皆には強い相手かもね。じゃあ、早速行こうか。第一回模擬訓練！15分以内にターゲットの捕縛か破壊』

早速か。

皆顔がこわばっている。まあ、得体の知れない相手は怖いよな

『アキナ君は相手を知ってるみたいだから、最初の3分は動いちゃダメだよ。皆の指示も禁止』

マジすか。

『それじゃあ、ミッションスタート!!』

戦いの火蓋は落とされた。

さてさて、ミッションスタートから3分。卓上計算だと既に3体は倒してないときついんだが、いまだ倒した数は2体だ。

まず全員の動きを見ていて思うところがいくつか。ティアナの指示はいい方だが……。まずはソレを言ってからかな。

それと思った以上にAMFがキツイらしい。

AMFってのはアンチマギリンクフィールドっていう、まあいわゆる魔法が聞かない空間のことだ。正確には工夫をすれば攻撃は通る

んだが、こいつらはさっぱりみたいだ。唯一分かっているのは……ティアナぐらいか。

「さーて、俺も動けかな。今から言うこと全員よく聞け！」

そういつて俺も動き出した。全員が俺の声に耳を傾ける。

「まずスバルとエリオ！二人でつぶしにかかるのはいいけど互いに邪魔しあってどうする！！もっと互いに声出せ！そうすりゃ見合うことなんて無くなる！」

俺の声を聞いて互いに顔を見合わせるスバルとエリオ。だからソレがだめっちゅーねん。

「次にキャラ！もっと自信出せ！フォローの仕方は良い！けどちょっと遅いぞ！スバルたちがつつこむ前に補助はかける！」

キャラはソレを聞いて少しうつむく。ああ、こりゃ本当に自信ないんだな。フリードが心配しちまってるじゃねえか。

「最後、ティアナ！良いぞ、もっとやれ！！ただ多重弾核は魔力食うから配分に気をつける！あとスバルたちの指示は今までどおり任せた！」

ティアナはソレを見て頷いた。よし、これで大丈夫だろ。多分ギリギリクリアが限界だけだな。

さ、俺も作業に入るかな。……と、その前に

「キャロ！スバルたちに威力強化の魔法かけたらこっち手伝ってくれ！」

「はい！！！」

よし、俺のほうもコレで大丈夫だ。あとは皆の実力次第。がんばってくれよ？

「さ、後10分。クリアできるかな？みんなは」

私は一人上空で皆の動きを見守る。はじめ2分は動きが堅かったけど、だんだんスムーズになってきている。アキナ君が戻ってからはどうだろうね？

「皆よく走りますねえ」

「まだまだ危なかしくて、ドキドキだけだね」

そういつつも私の顔はにやけてるんだろうな。
だって楽しみで仕方ないもん。教え子が強くなるのは教導官にとって一番うれしいことだから。今回は皆筋がいいからよく伸びるね。きつと。

「データの方はどう？ シャーリー」

「いいのが取れてます。5機ともいい子に仕上げますよ」

この分なら、5人に淒く合った設定のデバイスが造れそうと。

私はいつか私を超える人が出ればいいなあ……と、思いつつ、皆の様子を見ることに専念した。

アキナ君が戻ってから皆何か言われたみたいで、動きがよくなったね。じゃあ、お手並み拝見。

- - - - -

どうやらさつき俺が言ったことは効果があったようだ。エリオとスバルははじめよりもいいコンビネーションを見せていて、ティアナも順調。気づけば残りのガジェットは3機。残り時間も4分と言っ

たところだ。

「さて、俺も動こうか。準備はいい？キャロ」

「は、はい！！」

まだ緊張が抜け気ってねえな。ってかだからこそ俺のほうに寄越しただけだ。

皆のほうにやって失敗を繰り返すのもいいけど、この子は心が弱そうだ。プレッシャーで押しつぶされちまったら何もできなくなるし、多分。

「目の前に2体がジェットがいるわけだが、1秒でいい。動きを止めることはできるか？」

「は、はい、多分。一つ試してみたいものがあるので」

「ん。了解だ。じゃあ今からきっかり1分後頼むよ。俺の魔法はちよっと難しくてね、詠唱って言うか計算が必要なんだわ」

「分かりました！」

本番はこういうことできねえんだけどな。今回は近づかない限り攻撃してこない。まあ何もやらなければ安全ってわけだ。

つと、早く魔法組み込まないとな……

- - - - -

1分後

「よし！キャラ！頼む！！」

「はい！！」

私は今のところ自信がある魔法で相手を拘束するべく、詠唱を始めた。

「我が求めるは戒めるモノ、捕らえるモノ。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。」

錬鉄召喚“アルケミックチエーン”！！！！

地面から鎖を召喚。うまい具合にガジェットを絡めとった。だけど2体というのが私にはきつかったのか、一瞬足止めしただけで鎖が解けそうになる。でも、ここで負けるわけには行かない！私は何とか踏ん張って、1秒、たった1秒の隙を作った。

「アキナさん！！」

もう、無理!!
するとアキナさんは

「っはは、すげえじゃねえか……こつちも準備完了だ!!」

その隙を見逃さないよう、胸の前で手を組んだ。
そして相手のほうを向いて手に力をこめた。

すると驚くことに目の前の2体のガジェットは爆発するかのよう
に壊れていった。

「すごい……」

思わずつぶやいた。
何をしたんですか？
そう、聞こうとしたのだが

「あー疲れた」

思った以上に疲れていたみたいで、ぐったりしていた。
今聞くのも野暮なので、後で聞くことにしよう。

そんなことを考えていると

『はい! ミッションコンプリート!! 皆お疲れ様!! お話があるか

らはじめに集まったところに来てね』

なのはさんの声が。どうやらティアナさん達のほつも終わったみたい。

「アキナさん、行きましようか」

「ん？ああ、そつだな」

私達は皆が待つであろう場所に戻りました。

- - - - -

ああああああ疲れた。

いや、俺はそこまで走つたつもりないんだけどね、どうも使つた魔法の負担が大きいらしい。体がぐったり。魔力使いすぎたのかね。でもまさか2回使つただけでここまでなんてなあ……使つた魔法？それはまたいつか。

……ん？俺誰にいつてるんだ？

そういえばティアナたちはあれから4体のガジェットを倒した。ティアナのナイス射撃で2体撃破。スバルとエリオのコンビネーションで2体だそうだ。あゝあ、俺も見たかつたなあ……。

んで、今なのはさんの話聞いてるところだ。呼び方が変わってる理由な？なんか俺は『高町たいちよー』って言うってただけだな。スバルが『なのはさん』って呼んだらどっちかって言うところちのほうがいいということだ。みんなで『なのはさん』って言うことになった。もちろん任務中は違う呼び方にするつもりだけだな。

「 だから、これからがんばっていこうね！ 」

「 「 「 「 「 はい！ 」 」 」 」 」 」

なのはさんの言葉に皆でいい返事。訓練って感じだわ。

あ、そういうば一個気になってただけど

「なのはさん。今回の訓練…ってか模擬戦、評価的には？」

「そつだね……皆良いとこもあったけど悪いところもあったからね」

なのはさんの言葉を全員がしばを飲み、待つ。
そしてそこで言われたのは

「みんな、全然ダメだね！！！」

そんな元気よく言わなくても。

第3話 結成フォワード陣!! ついでに初訓練!! (後書き)

そういえば今更だけどアキナの目つき悪いつていう設定なんで入れたんだろ?正直いらないよね(笑)

当初はこの目つきでちびっ子達に怖がられて……だんだん仲良く……見たいのだったんだけど……
今回のスタンスの『兄弟』から外れる気がしたんですね

ってかなんで今この話してるんだろww
次回、デバイス回な気がします(笑)

ああ、主人公デバイス名どうしよう?
誰かアイディアプリーズですww
守備的な名前にしたいんだけどね……いっそ漢字にしようかな?ww

でわ、次回にまたww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648y/>

攻撃魔法が使えない魔導士

2011年11月9日01時02分発行